2019.1.16

○○中学校　第1学年　　社会科通信

なんでやねん

発行責任者　倉橋　忠

No.49

# 平安貴族の ぜいたくな生活 と 信仰(しんこう)・寿命(じゅみょう)

## なんで、平安時代の庶民の平均寿命は、縄文時代の人たちの平均寿命と変わらない？

授業中にも話題(わだい)にしましたが、食生活とトイレをネタに、貴族の生活を紹介(しょうかい)しておきましょう。

平安時代は、400年間もある非常に長い時代です。そのために、同じ平安時代と言っても、前期と中期、終期では社会のようすも、貴族の生活にも大きな違いがあります。しかし、中学校でその細部にわたる学習は必要ないでしょう。そこで、藤原氏の摂関政治が栄えた中期（藤原良房～道長・頼通のころ）を、平安時代の象徴的な場面として考えていきます。

さて、平安時代の貴族の華やかな生活とは反して、貴族の食生活は、いたって不健康で不自然なものでした。貴族は仏教と陰陽道(おんみょうどう)を信じ、肉食を拒否(きょひ)したため、病弱な体だったと考えられています[*1]。わけても、室内での動きだけで、運動不足になりがちであったため、女性の体位は著(いちじる)しく低下していました。さらに、早婚(そうこん)、多産(たさん)による母体の弱体化によって、乳幼児(にゅうようじ)の死亡率を増大させました。それらが、当時の貴族女性の平均死亡年齢を極端(きょくたん)に低くさせた原因でした。

ちなみに、記録で明らかな分だけでみた場合、貴族の平均寿命(へいきんじゅみょう)は、男性60歳余(あまり)、女性52歳余です。女性の寿命が短いのは、お産が関係しています。摂関政治で絶大な権力を誇った藤原道長は62歳で死んでいます。なお、道長の子どもたちには80歳をこえている者が多くみられます[*2]。

それに対して、平安時代の庶民の平均寿命(じゅみょう)は、35～45歳だったと考えられています。縄文時代と変わらないくらい短い寿命です。縄文時代では低い生産力と自然的条件が主な死因(しいん)でした。平安時代では、生産力が高くなったにもかかわらず、年貢(ねんぐ)や労役(ろうえき)によって庶民は疲れ、暮らすための社会的条件は悪かったと考えられています[*3]。

---

*1　樋口清之『新版　日本食物史』柴田書店 1987年 pp.134-135。
　渡辺実『日本食生活史』吉川弘文館 1964年 p.110。
　ただし、高木和男は、貴族の食生活は乳製品を多くとっていたと考えられるので栄養不足ではなかったのでないかと疑問を提起している。後掲、高木和男『食からみた日本史 上巻』p.119。
*2　高木和男『食からみた日本史　上巻』芽ばえ社 1986年 p.122。
*3　前掲、高木和男『食からみた日本史 上巻』pp.122-123。

# トイレのなかった寝殿造

## もっとも、庶民は、まだまだ野糞だけど …

平安時代の貴族の生活舞台は、母屋を中央にして左右対称に造られた寝殿造の建物でした。広い敷地内には庭と川・橋までこしらえた池が掘られていました。寝殿造の内部は柱だけで、壁はほとんどありませんでした。広い部屋を、御簾（みす）や几帳（きちょう）などの布を用いたカーテン状の障子や、屏風（びょうぶ）や衝立（ついたて）などのパネル状の障子で仕切って実際の生活空間を作っていました[*4]。このような寝殿造の構造は、夏の暑さを耐えるには都合が良かったのですが、冬はかなり寒かったと考えられます。

そのため、寝殿造の冬の寒さに耐えるために十二単のような「重ね着」が考案されたようです。貴族の女性は袴で下半身の冷えを防ぎました[*5]。一方、民衆はほとんどが竪穴住居に暮らしていたようです。衣服をあまり持たない民衆には竪穴住居の方が寒さを耐えるには都合が良かったのです。

ところで、その寝殿造には、トイレがありませんでした[*6]。貴族たちは樋殿とよばれる畳を敷いた部屋で、衝立で仕切った所に置かれた樋筥とか、厠箱、あるいは「まり箱」ともいう箱（おまる）で用を足したのです[*7*8]。束帯を着た貴族の男性は、竹の筒を使って、樋筥におしっこをしたようですし、高貴な女性は、十二単の中に樋筥を入れて、外から見えないように用を足したようです[*9*10]。もっとも、庶民は野糞だったと考えられてますけどね。

なお、室町時代には、寝殿造を母胎にして、書院造が造られるようになり武士の建物となりました。その書院造には、「トイレ」がありました。

以前の「**なんでやねん**」でも紹介したように、平城京の跡からは「水洗トイレ」[*11]や、貴族の屋敷跡などからも「ため込み式トイレ」跡が多く発見されます。奈良時代の住居には「トイレ」があったのに、なぜか寝殿造には「トイレ」がないのです。なぜ、寝殿造に「トイレ」がなかったのか。研究者の間で議論になっています。

---

*4　小泉和子『家具』近藤出版社 1980年 p.28。
*5　鳥居本幸代『平安朝のファッション文化』春秋社 2003年 p.61。
*6　楠本正康『こやしと便所の生活史』ドメス出版 1981年 p.37。
*7　荒俣宏「厠、便所、トイレの起源とは」『日本トイレ博物誌』図書出版社1990年 p.15。
*8　清少納言の『枕草子』にも、「御厠人(みかわびと)」という言葉が出てくるが、これは、厠箱(まり箱)の清掃を担当した女官のこと。
*9　前掲。荒俣宏「厠、便所、トイレの起源とは」p.10。
*10　芥川龍之介の『好色』は、貴族の女性に恋する男が、恋する女性の樋筥を盗もうとする話を題材にした短編小説である。興味のある人は、一度読んでみたら？
*11　スチュアート・ヘンリ『はばかりながら「トイレと文化」考』文春文庫 1993年 pp.136－141が、おもしろく、わかりやすい。